要　旨

本論は中日両言語の味覚形容詞と視覚形容詞における認知拡張用法に関する比較研究である。特に認知学の角度から中日両言語の味覚形容詞と視覚形容詞の認知拡張用法を詳しく考察したものである。本論では味覚形容詞については、「甘い」、「苦い」、「辛い」、「酸っぱい」、「塩辛い」五つの基本味覚形容詞を対象にし、そして、視覚方は「赤」、「白」、「黒」、「黄色」、「青」五つの色彩を対象として、それぞれの認知拡張用法を考察し、実例を分析ながら中日味覚形容詞と視覚形容詞の認知拡張用法の共通点と相違点を明らかにする。

人の感覚は主に五感（視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚）と分けられる。人間の生まれながらの器官でそれらの感覚を感じる。その点では、各国や民族は自然に対する感知はほとんど一緒だが、歴史や文化の発展に従って、それらの感覚についての認知もいろいろな意味や文化的要素を付けられた。その中で、味覚形容詞と視覚形容詞の語彙数量と使用方法、範囲等が特に豊かである。中国語と日本語の第二言語学習において、両言語の形容詞は重要点であり、難点でもある。感覚形容詞は形容詞の重要な部分であるため、その部分の考察がとても重要で、日本語を学習する中国語母語者、中国語を学習する日本語母語者にとって重要な意義がある。

認知言語学の観点だと、人間は世界に対する認識は体の感覚や経験によるものである。つもり、人は感情を表す時、大半自分の体に依存する。我々は熟知していた味覚経験と視覚経験を用いてそれ以外の感覚や経験、あるいは感覚以外の概念とかを表現する。そのようなことは言語の面では、形容詞の認知用法の拡張で、形容詞の意味増加現象である。

味覚形容詞の認知拡張については通感比喩用法がよく見られる。例えば：中国語の“甜”も日本語の「甘い」も、味覚から嗅覚へ、視覚へ、聴覚へ、及び心理感覚へも転用した。それに他の味覚形容詞の認知拡張も、まず、他五感への転用にした。あと、体の感覚や心理活動から脱出し、抽象的な意味を表す。しかし、両言語の各味覚形容詞の認知拡張用法は多様化で、必ずしも同じ同じ方向で発展するものではない。

視覚色彩形容詞の方は、体の感覚より、物事の見方についての評価転用が多い。物事が目に反映した色により、抽象的な理解を行い、特定の意味をつけたり、解読したりする。例えば：中国語では“红”に“权势”、“吉祥、喜庆”、“共产主义”等の象徴的意味をつけ

られ、日本語の「白」は「純潔」、「神聖、幸福」「長寿」「勝利」を象徴している。

本論では、中日両言語の味覚形容詞と視覚形容詞における認知拡張用法について、先行研究を踏まえて、語用分析と認知学角度から比較研究を行う。中日両言語の味覚形容詞と視覚色彩形容詞の共通点と相違点を明らかにすれば、中日両国語習得の際に、客感的に両言語を把握できるし、両言語の対訳や言語教育にも役に立つところがあると思う。

本論文に 4 章により構成され、各章の概要は以下のようである。

第一章　はじめに

本論の研究対象・目的・先行研究と研究方法等を述べている。

第二章　中日両言語味覚形容詞における認知拡張用法比較

2.1 中日両言語味覚形容詞の基本意味対照

2.2 中日両言語味覚形容詞の認知拡張及び用法考察

2.2.1“甜”・「甘い」

2.2.2“辣”・「辛い」

2.2.3“苦”・「苦い」

2.2.4“酸”・「酸っぱい」

2.2.5“咸”・「しょっぱい/塩辛い」

2.3　まとめ

本章では五つの味覚形容詞の認知拡張用法を詳しく分析し、その中から中国語と日本語味覚形容詞認知拡張用法の共通点と相違点を明らかにし、最後に本章についてのまとめをした。

第三章　中日両言語視覚色彩形容詞認知拡張用法比較

3.1“红”・「赤」

3.2“白”・「白い」

3.3“黑”・「黒い」

3.4“黄”・「黄」

3.5“青/蓝”・「青」

3.6 まとめ

本章では中国語と日本語の視覚色彩形容詞の認知拡張用法をそれぞれ具体的に説明し、違う言語・文化の背景により、中国の色彩感と日本の色彩感の異同を比較を行っている。

第四章　終わり

本論の初歩的な結論、考察の不足点と今後の研究課題をまとめて述べた。

参考文献